

責任者	理学部長	担当部局	理学部
-----	------	------	-----

1 理学部の理念、目的、各種方針

理学部の理念	変更の有無
自然科学の基本原則とその応用について教育と研究を行い、自然科学・科学技術と建学の精神であるキリスト教主義を基盤において再生・共生型社会の構築に貢献すること。	有・
理学部の目的	変更の有無
自然科学の法則と基本原則を理解するのみならず、具体的、実践的な課題を発見し、専門的な知識を適用し発展させることで、解決にむけて的確に歩みを進めることができる人材を養成する。他者を理解し自ら発信する総合的なコミュニケーションの能力、現代社会の抱える多様な課題の問題点を的確に見抜く能力を有し、各々の基礎的、専門的な知識を活かすことで従前には解決し得なかった課題の解決へと至る人材を養成する。 【数理科学科】 自然科学ならびに科学技術のあらゆる分野に重要な役割を果たす数学に関して、理論と応用の両面から教育と研究を行い、柔軟で論理的かつ創造的な思考能力を備えた人材を養成する。現代社会で必要とされる数学理論に関する柔軟で論理的かつ創造的な思考能力を有し、それらを積極的に現代社会の様々な問題に適用し解決することのできる人材を養成することで社会に貢献することを目的としている。 【物理・宇宙学科】 科学技術の基礎である物理学を基盤として、物理学や宇宙の未解決問題や本質的なイノベーションの創出に挑戦するチャレンジ精神と創造性を有する人材を育成する。古典物理学から量子力学等の現代物理学までの物理法則を理解するとともに、ミクロな物質からマクロな天体までの物理現象の実験・観測・理論を用いた研究体験を通して涵養された論理的思考力と専門性を有する人材を養成することで社会に貢献することを目的としている。 【化学科】 物質が示す多様な性質を原子・分子レベルから理解し、それらが持つ可能性の開拓と物質の創成によって、化学を基盤とする科学技術の進展と人類の生活の向上に貢献できる人材を養成する。多面的なカリキュラムと卒業研究を通じ、新物質の創成や未解明現象の解明に資する化学の基礎を体系的に身に付け、多様な課題を解決できる能力と新しい科学技術を創出できる能力を有する人材を養成することで社会に貢献することを目的としている。	有・
学位授与方針(DP)	変更の有無
関西学院は、キリスト教主義に基づく全人教育によって「Mastery for Service」を体現する世界市民」を育成することを使命としており、その実現に向けて、全ての学生が卒業時に学部で区別なく共通に身につけるべき知識・能力・資質を「Kwansei コンピテンシー」と定め、この獲得を念頭において、理学部の理念の下、理学部各学科の学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー)を以下のとおり定める。 【数理科学科】 数理科学科は、自然科学ならびに科学技術のあらゆる分野に重要な役割を果たす数学に関して、理論と応用の両面から教育と研究を行い、柔軟で論理的かつ創造的な思考能力を備えた人材を養成する。 よって、以下のような知識と能力を有する学生に「学士(理学)」の学位を授与する。 1. [関心・意欲・態度] 自律的な態度と社会に貢献しようとする姿勢 (1) 自らを律する強さと高い倫理観をもち、他者と協力してよりよい人間関係や社会を築くための基本的な態度を身につけている。 (2) 自然科学・科学技術と社会、文化、人間との関係に深い関心を抱き、自然科学・科学技術の発展を通じて、人類の進歩に貢献しようとする意欲をもっている。 2. [知識・理解] 幅広い知識と深い専門性 (1) 社会、文化、人間、自然科学・科学技術についての幅広い知識と、多角的な視点を身につけている。 (2) 数理科学分野における基礎知識を体系的・構造的に理解している。 (3) 数理科学分野における基礎的な技能を修得している。 (4) 基礎知識や基礎的な技能を応用するための知識及び柔軟な思考力を有している。 (5) 社会、文化、人間等との様々な関係において、専門分野の学問的・技術的発展がもつ意義を理解している。 3. [技能・表現] 実践的な学習技能とコミュニケーション力 (1) 論理的思考力、情報収集力、データ分析力、表現力及びコンピュータとネットワークを活用する能力を身につけている。 (2) 日本語及び英語によって、コミュニケーションできる力を身につけている。 4. [思考・判断] 課題解決のための総合的思考・判断力 (1) 現代社会における問題に取り組むための、課題発見力、創造的思考力及び課題解決能力を身につけている。 【物理・宇宙学科】 物理・宇宙学科は、科学技術の基礎である物理学を基盤として、物理や宇宙の未解決問題や本質的なイノベーションの創出に挑戦するチャレンジ精神と創造性を有する人材を育成する。よって、以下のような知識と能力を有する学生に「学士(理学)」の学位を授与する。 1. [関心・意欲・態度] 自律的な態度と社会に貢献しようとする姿勢 (1) 自らを律する強さと高い倫理観をもち、他者と協力してよりよい人間関係や社会を築くための基本的な態度を身につけている。 (2) 自然科学・科学技術と社会、文化、人間との関係に深い関心を抱き、自然科学・科学技術の発展を通じて、人類の進歩に貢献しようとする意欲をもっている。 2. [知識・理解] 幅広い知識と深い専門性 (1) 社会、文化、人間、自然科学・科学技術についての幅広い知識と、多角的な視点を身につけている。 (2) 物理学分野における基礎知識を体系的・構造的に理解している。 (3) 物理学分野における基礎的な技能を修得している。 (4) 基礎知識や基礎的な技能を応用するための知識及び柔軟な思考力を有している。 (5) 社会、文化、人間等との様々な関係において、専門分野の学問的・技術的発展がもつ意義を理解している。 3. [技能・表現] 実践的な学習技能とコミュニケーション力 (1) 論理的思考力、情報収集力、データ分析力、表現力及びコンピュータとネットワークを活用する能力を身につけている。	有・

(2) 日本語及び英語によって、コミュニケーションできる力を身につけている。

4. [思考・判断]課題解決のための総合的思考・判断力
 (1) 現代社会における問題に取り組むための、課題発見力、創造的思考力及び課題解決能力を身につけている。

【化学科】
 化学科は、物質が示す多様な性質を原子・分子レベルから理解し、それらがもつ可能性の開拓と物質の創成・生産によって、化学を基盤とする科学技術の進展と人類の生活の向上に貢献できる人材を養成する。
 よって、以下のような知識と能力を有する学生に「学士(理学)」の学位を授与する。

1. [関心・意欲・態度]自律的な態度と社会に貢献しようとする姿勢
 (1) 自らを律する強さと高い倫理観をもち、他者と協力してよりよい人間関係や社会を築くための基本的な態度を身につけている。
 (2) 自然科学・科学技術と社会、文化、人間との関係に深い関心を抱き、自然科学・科学技術の発展を通じて、人類の進歩に貢献しようとする意欲をもっている。

2. [知識・理解]幅広い知識と深い専門性
 (1) 社会、文化、人間、自然科学・科学技術についての幅広い知識と、多角的な視点を身につけている。
 (2) 化学分野における基礎知識を体系的・構造的に理解している。
 (3) 化学分野における基礎的な技能を修得している。
 (4) 基礎知識や基礎的な技能を応用するための知識及び柔軟な思考力を有している。
 (5) 社会、文化、人間等との様々な関係において、専門分野の学問的・技術的発展がもつ意義を理解している。

3. [技能・表現]実践的な学習技能とコミュニケーション力
 (1) 論理的思考力、情報収集力、データ分析力、表現力及びコンピュータとネットワークを活用する能力を身につけている。
 (2) 日本語及び英語によって、コミュニケーションできる力を身につけている。

4. [思考・判断]課題解決のための総合的思考・判断力
 (1) 現代社会における問題に取り組むための、課題発見力、創造的思考力及び課題解決能力を身につけている。

教育課程の編成・実施方針(CP) 変更の有無

各学科の学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー)を踏まえ、各学科の教育課程の編成方針(カリキュラム・ポリシー)を以下のように定める。

[総合教育科目](3学科共通)
「キリスト教科目」
 初年次に配当し、本学の建学の精神であるキリスト教主義に基づく人間形成によって、自らを律する強さ、倫理観、他者との協調性等の基本的な態度を身につけさせる。

「英語教育科目」
 自然科学・科学技術分野における共通言語である英語を低学年次に配当する。自ら情報発信できるよう、総合的な英語コミュニケーション能力を修得させる。

「総合選択科目」
 社会、文化、人間、自然科学・科学技術について、幅広い教養と視野を身につけさせる。

【数理科学科】
 理学部数理科学科の学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー)を踏まえ、「学士(理学)」を授与するにあたり必要とされる知識・技能を体系的に修得できるよう教育課程を編成する。
 本学科における授業科目を、総合教育科目と専門教育科目に大別する。総合教育科目はキリスト教科目、英語教育科目、総合選択科目にて構成し、専門教育科目は必修科目、基礎科目、コンピュータ科目、発展科目、専門選択科目にて構成する。

[専門教育科目]

「必修科目」
 数理科学科の学びの基盤となる科目から演習科目まで、本学科の学生全員が履修すべき科目を1年次、3年次及び4年次に体系的に配当し修得させる。

「基礎科目」
 1年次～3年次に配当し、各専攻分野における基礎知識を講義等を通じて修得させる。

「コンピュータ科目」
 1年次～3年次に配当し、各専攻分野における基礎的な技能、コンピュータを活用する技能及び基礎知識を体系的・構造的に理解し論理的に思考する力を演習を通じて修得させる。

「発展科目」
 4年次に配当し、基礎知識や基礎的な技能を応用するための知識を講義を通じて修得させる。

「専門選択科目」
 主に専攻分野以外の自然科学・科学技術等について、幅広い教養と視野を養成し、各専攻分野の伸展となる知識を修得させる。

理学部数理科学科 カリキュラム・マップ (概要)
 (ディプロマ・ポリシーの項目とカリキュラム・ポリシーの科目群の主たる方針との対応表)

ディプロマ・ポリシーの項目 カリキュラム・ポリシーの科目群		1		2					3		4
		(1)	(2)	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(1)	(2)	(1)
総合教育科目	キリスト教科目	○									
	英語教育科目									○	
	総合選択科目			○							
専門教育科目	必修科目				○	○	○	○	○	○	○
	基礎科目				○	○					
	コンピュータ科目				○	○	○		○		
	発展科目		○				○	○			○
	専門選択科目		○	○	○	○	○		○	○	

有・無

【物理・宇宙学科】

理学部物理・宇宙学科の学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー)を踏まえ、「学士(理学)」を授与するにあたり必要とされる知識・技能を体系的に修得できるよう教育課程を編成する。

本学科における授業科目を、総合教育科目と専門教育科目に大別する。総合教育科目はキリスト教科目、英語教育科目、総合選択科目にて構成し、専門教育科目は物理系科目、数学系科目、専門選択科目にて構成する。

[専門教育科目]

「物理系科目」

卒業研究に関連する科目(卒業研究科目)、各専攻分野において核となる基礎的な科目(コア科目)、実験演習科目及び専門知識を深める科目(選択科目)を体系的に配置し、必要な知識や技能を修得させる。

「数学系科目」

主に数学に関する基礎知識や基礎的な技能及びそれらを活用するための知識や技能を講義を通じて修得させる。

「専門選択科目」

主に専攻分野以外の自然科学・科学技術等について、幅広い教養と視野を養成し、各専攻分野の伸展となる知識を修得させる。

理学部物理・宇宙学科 カリキュラム・マップ (概要)

(ディプロマ・ポリシーの項目とカリキュラム・ポリシーの科目群の主たる方針との対応表)

ディプロマ・ポリシーの項目		1		2					3		4
カリキュラム・ポリシーの科目群		(1)	(2)	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(1)	(2)	(1)
総合教育科目	キリスト教科目	○									
	英語教育科目									○	
	総合選択科目			○							
専門教育科目	物理系科目	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	数学系科目				○		○		○	○	
	専門選択科目				○	○	○		○	○	

【化学科】

理学部化学科の学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー)を踏まえ、「学士(理学)」を授与するにあたり必要とされる知識・技能を体系的に修得できるよう教育課程を編成する。

本学科における授業科目を、総合教育科目と専門教育科目に大別する。総合教育科目はキリスト教科目、英語教育科目、総合選択科目にて構成し、専門教育科目は必修科目、基礎科目、物理分析化学科目、有機無機化学科目、専門選択科目にて構成する。

[専門教育科目]

「必修科目」

実験科目を1年次～3年次に、卒業研究に関する科目を4年次に配当し、本学科の全ての学生が身につけるべき知識と技能を体系的に修得させる。

「基礎科目」

主に1年次と2年次に配当し、各専攻分野における基礎知識を講義等を通じて修得させる。

「物理分析化学科目」

2年次と3年次に配当し、物理化学と分析化学における基礎知識や基礎的な技能を応用するための知識を講義を通じて修得させる。

「有機無機化学科目」

主に2年次と3年次に配当し、有機化学と無機化学における基礎知識や基礎的な技能を応用するための知識を講義を通じて修得させる。

「専門選択科目」

専門分野の応用となる科目、専攻分野以外の自然科学・科学技術等について、幅広い教養と視野を養成し、各専攻分野の伸展となる知識を修得させる。

理学部化学科 カリキュラム・マップ (概要)

(ディプロマ・ポリシーの項目とカリキュラム・ポリシーの科目群の主たる方針との対応表)

ディプロマ・ポリシーの項目		1		2					3		4
カリキュラム・ポリシーの科目群		(1)	(2)	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(1)	(2)	
総合教育科目	キリスト教科目	○									
	英語教育科目									○	
	総合選択科目			○							
専門教育科目	卒業研究科目		○					○			○
	実験科目				○	○			○		
	基礎科目				○						
	物理分析化学科目						○	○			
	有機無機化学科目						○	○			
	専門選択科目			○							

学生の受け入れ方針(AP)

変更の有無

I. 関西学院大学アドミッション・ポリシー

世界を視野におさめ、他者(ひと)への思いやりと社会変革への気概を持ち、高い識見と倫理観を備えて自己を確立し、自らの大きな志を持って行動力を発揮する“Mastery for Service(奉仕のための練達)”を体現する世界市民を育成することが関西学院のミッションです。

関西学院大学は、このミッションに共感し、大学での学びや諸活動の中で、自分への挑戦をし続ける意欲にあふれ、さまざまな適性を有する多様な背景をもった学生・生徒を世界のあらゆる地域から受け入れます。

そのために、これまでに培われた確かな基礎学力、活動や経験を通じて身に付けた資質、能力、学ぶ意欲や人間性などを、多様な入試制度により多面的に評価することを基本的な方針としています。

①・・・無

II. 学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー)及び教育課程の編成方針(カリキュラム・ポリシー)を踏まえ、各学科の学生受入れの方針(アドミッション・ポリシー)を次のように定める。学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー)及び教育課程の編成方針(カリキュラム・ポリシー)を踏まえ、各学科の学生受入れの方針(アドミッショ

ン・ポリシー)を次のように定める。

【数理科学科】

数理科学科は、現代社会で必要とされる数学理論に関する柔軟で論理的かつ創造的な思考能力を有し、それらを積極的に現代社会の様々な問題に適用し解決することのできる人材を養成することで社会に貢献することを目的としている。
よって、次のような入学者を求める。

- ① 理学部及び数理科学科の目的及び養成する人材像に賛同し、自然科学・科学技術の発展を通じて、自律的な態度をもって社会・文化・人類の発展に貢献しようとする学生
- ② 理数系科目の十分な学力を有し、自然科学・科学技術分野の体系的な知識・技能を高い意欲をもって修得しようとする学生
- ③ 人文・社会系科目の基礎学力を有し、多角的な視点を意欲的に身につけようとする学生
- ④ 日本語及び英語の基礎学力を有し、その学力を基に文章読解・作成、コミュニケーション能力の向上に努める学生

【物理・宇宙学科】

物理・宇宙学科は、古典物理学から量子力学・相対性理論等の現代物理学までの物理法則を理解するとともに、ミクロな物質からマクロな天体までの物理現象の実験・観測・理論を用いた研究体験を通して涵養された論理的思考能力と専門性を有する人材を養成することで社会に貢献することを目的としている。
よって、次のような入学者を求める。

- ① 理学部及び物理・宇宙学科の目的及び養成する人材像に賛同し、自然科学・科学技術の発展を通じて、自律的な態度をもって社会・文化・人類の発展に貢献しようとする学生
- ② 理数系科目の十分な学力を有し、自然科学・科学技術分野の体系的な知識・技能を高い意欲をもって修得しようとする学生
- ③ 人文・社会系科目の基礎学力を有し、多角的な視点を意欲的に身につけようとする学生
- ④ 日本語及び英語の基礎学力を有し、その学力を基に文章読解・作成、コミュニケーション能力の向上に努める学生

【化学科】

化学科は、基礎化学と無機分析化学、有機化学、物理化学を中心とした多面的なカリキュラムと卒業研究を通じ、新物質の創成や未解明現象の解明に資する化学の基礎を体系的に身につけ、多様な課題を解決できる能力と新しい科学技術を創出できる能力を有する人材を養成することで社会に貢献することを目的としている。
よって、次のような入学者を求める。

- ① 理学部及び化学科の目的及び養成する人材像に賛同し、自然科学・科学技術の発展を通じて、自律的な態度をもって社会・文化・人類の発展に貢献しようとする学生
- ② 理数系科目の十分な学力を有し、自然科学・科学技術分野の体系的な知識・技能を高い意欲をもって修得しようとする学生
- ③ 人文・社会系科目の基礎学力を有し、多角的な視点を意欲的に身につけようとする学生
- ④ 日本語及び英語の基礎学力を有し、その学力を基に文章読解・作成、コミュニケーション能力の向上に努める学生

Ⅲ. 入学試験毎のアドミッション・ポリシー

1. 一般選抜入学試験

一般選抜入学試験は、各学部での教育に必要な「総合的な学力を持つ受験生を選抜する」ものです。

一般入学試験では各学部の教育理念・目標に基づき試験教科・科目、配点を設定し、筆記試験により関西学院大学で学ぶために必要な学力「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」を判定するための問題を独自に作成しています。

全学部日程の文系入学試験では本学で学ぶために必要な「英語」「国語」を必須とし、「日本史」「世界史」「地理」「数学(記述式)」を選択科目とし筆記試験を実施します。

全学部日程の国際学部については、高い英語能力を有する生徒を評価するため、「英語」に特化した「英語」「英語論述」による入学試験も実施しています。学部個別日程の文系入学試験では本学で学ぶために必要な「英語(記述式含む)」「国語(記述式含む)」を必須とし、「日本史」「世界史」「数学(記述式)」を選択科目とし筆記試験を実施します。なお文学部・法学部では「日本史」「世界史」「数学(記述式)」に加えて「地理」を選択科目に加えています。人間福祉学部については学部個別日程において「英語(記述式含む)」「国語(記述式含む)」の2科目による筆記試験を行っています。教育学部については初等教育学コースの主体性評価方式の入試において、高等学校における生徒会活動、学校行事、課外活動等でのリーダーシップを、調査書と提出書類を合わせて評価する入学試験を実施します。

理系入学試験においては全学部日程を2日間実施、入試制度も2種類実施しています。総合型および数学・理科重視型においては、本学で学ぶために必要な「英語」「数学(記述式)」を必須とし、理科(記述式)「物理」「化学」「生物」のいずれかを選択する筆記試験を実施しています。一般入学試験共通テスト併用／英数日程は、英語・数学型、共通テスト併用型・英語、共通テスト併用型・数学の3方式を実施しています。英語・数学型は、関西学院大学の「英語(記述式含む)」と「数学(記述式)」による筆記試験を実施し、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」を判定しています。共通テスト併用型・英語、共通テスト併用型・数学は、関西学院大学の「英語(記述式含む)」または「数学(記述式)」に、大学入学共通テストの教科・科目の得点を加味し、各学部で学ぶための学力と総合的な基礎学力を有する生徒を選抜するために実施しています。

大学入学共通テストを利用する入学試験は、「一般入試とは異なるタイプの受験生を受け入れるための入試制度」と位置づけています。大学入学共通テストで実施している教科・科目の筆記試験をもとに、本学で学ぶために必要な総合的な基礎学力を「知識・技能」を中心に判定を行い、大学入学共通テストの得点のみで合否判定を行います。

1 月出願においては、総合政策学部3科目英数型を除く文系学部は「外国語」「国語」を必須として、「数学」「理科」「地理歴史」「公民」から高得点を採用する方式を3科目型、5科目型の方式で実施します。また「外国語」「国語」「数学」「地理歴史・公民」「理科」を必須とする7科目型を実施します。

理系学部は「英語」「数学」を必須として各学科の学びに必要な科目について必須科目もしくは選択科目として加え、高等学校における各教科の基礎学力のうち「知識・技能」を評価します。3月出願においては、文系学部は「英語」を必須とし、「国語」「数学」「理科」「地理歴史」「公民」から高得点科目を採用する方式を実施しています。理系学部は「英語」「数学」を必須として各学科の学びに必要な科目について必須科目もしくは選択科目として加え、高等学校における各教科の基礎学力のうち「知識・技能」を評価します。また、大学入学共通テストを利用する入学試験(1月出願 英語資格・検定試験活用型)は、「読む」「書く」「聞く」「話す」の英語の4技能を身に付けた生徒を選抜するために、提出された書類のうち英語資格・検定試験のスコアを出願資格として高く評価し、大学入学共通テストの教科・科目の得点を活用して実施する入学試験であり、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」を得点として評価し、検定試験に取り組んだ「主体性」を高く評価します。

2. グローバル入学試験

グローバル入学試験は、入学後、本学のスーパーグローバル大学創成事業におけるインターナショナル・プログラム(国際教育プログラム)に積極的に取り組むことを希望する生徒や、将来、国際的な活躍を目指す生徒を対象に3つのカテゴリーで実施する入学試験です。

① 国際的な活躍を志す者を対象とした入学試験

国際的な活躍を志す者を対象とした入学試験は、関西学院大学のインターナショナル・プログラム(国際教育プログラム)において国際社会で活躍する能力を身に付けることを志し、秀でた英語コミュニケーション能力を有した上で、国際交流体験による異文化社会における経験、もしくは国際的課題に関して興味をもち、課題解決のための提案・実践に意欲を有する者を対象とした入学試験です。

出願資格として、英語資格・検定試験においてCEFR B1程度以上を有した上で、海外における留学経験を有する生徒、模擬国連等に取り組み問題解決能力を育んだ生徒、全国レベルの英語弁論大会・英語エッセイコンテスト等において入賞実績を有する生徒を対象に設定し、調査書等の提出書類とあわせて、「主体性」を中心とした書類審査を行います。さらに、英語を題材とした論述試験、日本語小論文試験を実施し「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」を評価し、書類審査の結果と合わせた総合評価による一次審査を行います。二次審査では志望する学部の面接(口頭試問含む)により学ぶ意欲や人間性などを評価し選抜を行います。

② インターナショナル・バカロレア入学試験

インターナショナル・バカロレア入学試験は、関西学院大学のインターナショナル・プログラム(国際教育プログラム)において、国際社会で活躍する能力を身につけることを志す者で、国際的に認められた大学入学資格であるインターナショナル・バカロレアDP(ディプロマ・プログラム)の課程を修了後、統一試験に合格し、イ

ンターナショナル・バカロレア資格を有する者を受け入れるための入学試験です。

出願時においてフルディプロマを取得済みの者でスコアが 32 ポイント以上の者、もしくは取得見込で IB PREDICTED SCORE が出願時に 32 ポイント以上である者は英語論述審査が免除となります。また日本的一条校において上記のスコアを有する者は日本語小論文が免除となります。これに満たない者については、英語を題材とした論述試験・日本語小論文試験を実施し「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」を評価する一次審査を行います。二次審査においては学部の面接(口頭試問含む)により学ぶ意欲や人間性などを評価し選抜を行います。

③ グローバルサイエンティスト・エンジニア入学試験

グローバルサイエンティスト・エンジニア入学試験は国際的に活躍する科学者や技術者となることを志し、自然科学に関する科目について一定の学力を有し、秀でた英語コミュニケーション能力を有する者、インターナショナル・バカロレア資格を有する者、高等学校在籍時に海外において自然科学に関する教育を受けた経験を有する者もしくは自然科学分野における特記すべき国際交流経験を有する者、国際科学技術コンテストに出場した経験を有する者を出願資格として設定し、調査書等提出された書類とあわせ「主体性」を中心に書類審査を行います。また、入学後必要な数学、理科の基礎知識を問う筆記試験を実施し「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」を中心に評価し、書類審査の結果と合わせた総合評価による一次審査を行います。二次審査では志望する学部の面接(口頭試問含む)により学ぶ意欲や「主体性・多様性・協働性」について評価し、出願時提出書類と合わせて総合的に判断し選抜を行います。

④ 帰国生徒入学試験

国際化時代に伴い、海外において勤務する日本人の数は多数にのぼっています。また、外国文化摂取のために長期留学する者も増加しています。この現象に伴う帰国生徒の教育問題は高い関心事となっています。しかし、海外での教育条件や生活環境などの違いによって大学に進学できる能力を有しながらも、日本の大学入試制度に対応できないために、正當に評価されていないという問題が指摘されてきました。これに対して、本学では、全国の大学に先駆けて 1964 年に帰国生徒の受け入れについての規程を制定し、その先進性で評価されています。

この入学試験は、帰国生徒の海外での経験を評価して受け入れるためであると同時に、多様な学生を受け入れることによってキャンパスの活性化を図る教育的効果も期待し、いわゆる「多元的入試」の一環として行っています。諸外国で勉学してきた帰国生徒が海外での貴重な経験と知識を生かし、学内での相互交流を通して学識や人間性をより一層高め、将来の日本および世界を支えていく真の国際人として成長していくことを期待しています。

筆記試験を実施する学部については、英語、日本語に関する知識・技能、思考力・判断力・表現力の評価を行い、面接(口頭試問含む)において海外での体験において培った主体性・多様性・協働性や、本学で学ぶ意欲について評価を行います。

3. 推薦入学

推薦入学は高等学校長の責任ある推薦により本学で学ぶために必要な学力を有する生徒を受け入れるものです。審査においては調査書、自己推薦書、志望理由書、学校長推薦書等の提出書類による書類審査と面接(口頭試問含む)を通じて、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」を多面的・多元的に評価します。

① 院内推薦入学

1) 関西学院高等部

関西学院高等部推薦入学は関西学院の一貫教育の大きな柱として位置づけられています。高等部でキリスト教主義教育による関西学院の建学の精神をもとに学んだ生徒を受け入れることにより、大学進学後もそれぞれの学部において、正課、課外活動、学内諸活動の面で学生の核となり、他の入学者に対しても良い影響を与え関西学院の学風を担うことを期待し実施するものです。

審査では志願提出書類の書類審査と面接(口頭試問含む)を通じて、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」を多面的・多元的に評価します。

2) 関西学院千里国際高等部 関西学院千里国際高等部推薦入学は、千里国際高等部の特色である国際教育と、キリスト教主義教育による関西学院の建学の精神をもとに学んだ生徒を受け入れることにより、大学進学後もそれぞれの学部において、正課、課外活動、学内諸活動の面で学生の核となり、関西学院大学の活性化に寄与することを期待し実施するものです。

審査では志願提出書類の書類審査と面接(口頭試問含む)を通じて、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」を多面的・多元的に評価します。

② 継続校推薦入学

啓明学院継続校推薦入学は、キリスト教主義教育により学んだ啓明学院高等学校の生徒を受け入れることにより、大学進学後もそれぞれの学部において、正課、課外活動、学内諸活動の面で学生の核となり、関西学院大学の活性化に寄与することを期待し実施するものです。

審査では志願提出書類の書類審査と面接(口頭試問含む)を通じて、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」を多面的・多元的に評価します。

③ 提携校推薦入学

関西学院大学提携校推薦入学は、個性的でかつ高い資質をもつ生徒を受け入れるために実施しています。関西学院の建学の精神および教育理念を理解し、高等学校独自の特色を活かした優れた教育プログラムによって学んだ生徒を受け入れるものです。

審査では志願提出書類の書類審査と面接(口頭試問含む)を通じて、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」を多面的・多元的に評価します。

④ 系属校推薦入学

関西学院大学系属校推薦入学は、科学技術に強い興味・関心・意欲を持ち、グローバルな観点に立って国際社会での活躍を目指す生徒を受け入れるために実施しています。

関西学院の建学の精神および教育理念を理解し、高等学校独自の特色を活かした優れた教育プログラムによって学んだ生徒を受け入れるものです。

審査では志願提出書類の書類審査と面接(口頭試問含む)を通じて、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」を多面的・多元的に評価します。

⑤ 協定校推薦入学

1) キリスト教学校校

関西学院大学協定校推薦入学は、高等学校のキリスト教主義教育により学び、個性的でかつ高い資質をもつ生徒を受け入れるために実施しています。関西学院の建学の精神および教育理念を理解し、高等学校独自の特色を活かした優れた教育プログラムによって学んだ生徒を受け入れるものです。審査では志願提出書類の書類審査と面接(口頭試問含む)を通じて、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」を多面的・多元的に評価します。

2) グローバル校

関西学院大学協定校推薦入学は、個性的でかつ高い資質をもつ生徒を受け入れるために実施しています。21 世紀的な教育目標であるグローバルな観点に立って国際社会に貢献できる人材として、関西学院の建学の精神および教育理念を理解し、高等学校独自の特色を活かした優れた教育プログラムによって学んだ生徒を受け入れるものです。

審査では志願提出書類の書類審査と面接(口頭試問含む)を通じて、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」を多面的・多元的に評価します。

3) グローバル+キリスト教学校校

関西学院大学協定校推薦入学は、21 世紀的な教育目標であるグローバルな観点に立って国際社会に貢献できる人材として、高等学校のキリスト教主義教育により学び、個性的でかつ高い資質をもつ生徒を受け入れ、関西学院の建学の精神および教育理念を理解し、高等学校独自の特色を活かした優れた教育プログラムによって学んだ生徒をも受け入れるために実施するものです。

審査では志願提出書類の書類審査と面接(口頭試問含む)を通じて、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」を多面的・多元的に評価します。

⑥ 指定校推薦入学

指定校推薦入学は一定の学力を有する生徒を高等学校長の責任に基づく推薦を受け、書類審査・面接(口頭試問含む)によって総合的に評価し受け入れるための制度です。出願書類と面接(口頭試問含む)において、一定水準以上の「知識・技能」、各学部で学ぶために必要な「思考力・判断力・表現力」や「主体性・多様性・協働性」が備わっているか等々を評価し、入学後の勉学における明確な志向および意欲の評価に重点を置き総合的に審査しています。

理学部

関西学院大学理学部を強く希望する優秀な生徒で、自然科学・科学技術の基礎知識と能力の修得に情熱を有する者を総合的学力評価に基づく推薦制度により迎え入れ、将来性ある人材に育成することを目的としています。

審査では、出願時提出書類、面接(口頭試問含む)を通じて、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」を多面的・多元的に評価します。

4. 探究評価型入学試験

関西学院は、キリスト教主義に基づく「学びと探究の共同体」として、ここに集うすべての者が生涯をかけて取り組む人生の目標を見出せるよう導き、思いやりと高潔さをもって社会を変革することにより、スクールモットー“Mastery for Service(奉仕のための練達)”を体現する、創造的かつ有能な世界市民を育むことを使命としています。その使命を具現化できる、意欲に満ちた受験生を求め、本入学試験を実施します。

本入学試験では、本学で学ぶにふさわしい知識・技能、思考力・判断力・表現力を有しているだけでなく、横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して、自ら課題を発見し、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を持ち、多様な人々と協働して学ぶ態度を身につけた生徒を求めています。

第一次審査においては書類審査を行います。横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して培った力を提出書類にて多面的、多元的に評価します。

さらに第二次審査において、学部毎に面接・集団討論・プレゼンテーション・口頭試問を行います。

高等学校での学びを通じて培ったありのままの力を評価しますので、入学試験のために特段の準備を必要とするものではありません。

出願資格として、英語資格・検定試験スコア CEFR A2 レベル以上を有する者と設定しています。

6. UNHCR 難民高等教育プログラムによる推薦入学

「UNHCR 難民高等教育プログラムによる推薦入学」は、関西学院大学と国連難民高等弁務官(UNHCR)駐日事務所および国連 UNHCR 協会との協定に基づき実施する入学制度です。これは本学の建学の精神に基づく「人類の幸福と平和に資する世界市民の育成」を現代に即したかたちで実現するためのものです。

日本で生活する難民の方々は、厳しい環境下におかれています。特に教育面では、本人や家族の経済的事情や、母国での出身校の卒業証明が得られないなどの理由で、高等教育を受ける機会を失っている場合が少なくありません。それが就労条件の悪化、さらには、経済的事情の悪化につながっています。

こうした状況を少しでも改善することを目的とするこの推薦入学制度で入学した生徒が、高い教養と専門性を身につけ、将来、日本、母国あるいは国際社会において平和の構築や社会の発展を支える人材へと成長することが期待されています。また関西学院大学で共に学ぶ他の学生にとっても、迫害や戦争といった国際社会が抱える問題を身近に捉えるとともに、日本国内の国際化を意識する機会となります。

国連難民高等弁務官(UNHCR)駐日事務所および国連 UNHCR 協会の推薦に基づき、面接(口頭試問含む)を行い本学で学ぶ意欲を中心にしながら「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」について評価を行います。

7. スポーツ能力に優れた者を対象とした入学試験

この選抜入学試験制度は、スポーツ活動において優れた能力と競技実績を有し、入学後は学業と課外活動を両立させる強い意欲をもつ者を積極的に受け入れ、本学における教育の活性化と課外活動の一層の振興に寄与することを目指すものです。

提出された書類に基づきスポーツ実績を評価するとともに、本学で学ぶにあたっての基礎学力、知識、表現力、論理的思考力を筆記試験により評価を行います。一次合格者に対する二次審査は面接(口頭試問含む)を実施し志願する学部で学ぶ意欲を中心に評価を行います。

8. 外国人留学生入学試験

本学は、米国南メソジスト監督教会の宣教師、W. R. ランバースによって創設されました。開学当初から多くの外国人教員が教鞭をとっていたこともあり、外国人留学生を古くから受け入れ、日本の大学の中では国際色豊かな大学としてその学風を育んできました。

この入学試験制度は外国人留学生を対象とし、さまざまな国からの留学生を受け入れることにより、大学の国際性を一層高め、ひいてはキャンパスの活性化を図る教育的効果も期待した、いわゆる「多元的入試」の一環として実施されます。

出願時の提出書類に基づき審査を実施し、本学で学ぶにあたって必要な日本語力および、基礎学力を有しているかを審査した後、各学部が面接審査(口頭試問を含む)・筆記試験等を実施し、志願する学部で学ぶ意欲や人間性などを中心に評価し、出願時提出書類と合わせて総合的に判断し、選抜します。

9. 学部特色入学試験

関西学院のスクールモットーは“Mastery for Service”。これは、第4代院長 C. J. L. ベーツ宣教師が学生たちに与えた言葉で、「奉仕のための練達」と訳されています。わかりやすく言えば、「人々に奉仕できる、社会に役立つ知識と人間性を、自らの主体性を持って磨き上げよ」ということです。関西学院大学では、その教育目的を具現化できる、意欲に満ちた受験生を求め、本入学試験を実施します。

特に、本学で学ぶにふさわしい知識・技能、思考力・判断力・表現力を有しているだけでなく、各学部が求める多様な能力や、様々な経験や活動を通じて身につけた豊かな人間性をもった学生を求めています。

理学部

本学のスクールモットーである“Mastery for Service(奉仕のための練達)”の理念のもと、自然科学の基礎をしっかりと学び、それらを応用に生かしていく能力を養いたいと考えている若者たち、本学の建学の精神を背景にして、人格形成、自己の確立に努め、自然科学の知識や能力に優れているだけでなく、人間として深みのある科学者や技術者になりたいと考えている若者たち、そのような人々を対象に学部特色入試を実施します。

関西学院大学理学系学部の目標のひとつである「より良い社会の実現」のための一大研究拠点の構成員として、学部の理念に賛同し、ここで学ぶ意欲を強く持つ学生を求めます。

学部特色入試とは、高等学校までに学んだ基礎的な知識、技能、思考力を備え、それに加えて「学びに向かう力・人間性」を持った学生を評価する入試です。また、入学後必要な数学、理科の基礎知識を問う筆記試験を実施し「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」を中心に評価し、書類審査の結果と合わせた総合評価による一次審査を行います。二次審査(面接(口頭試問含む))は、「思考力・判断力・表現力」を確認するとともに、学問領域を探究していこうとする力や意欲を総合的に評価します。

教員組織の編制方針

変更の有無

生き生きとした魅力ある学部として、教育・研究の活力を保ち、持続的に社会貢献できる体制を構築するために、教員組織の編成方針を次の通り定めている。

- ①教員の年齢構成が、特定の年齢層に極端にかたよらないようにする。
- ②女性教員を積極的に採用し、各学科の専任教員として少なくとも1名の女性教員が在籍するようにする。
- ③任期制教員枠を利用して、若手教員を積極的に採用して教育・研究の活性化を図るとともに、若手教員をサポートする体制を整備する。
- ④教員の研究分野は、多様性を保ちつつ各学科の特色を出すように配慮する。
- ⑤英語教育充実のため、ネイティブ教員を積極的に採用するとともに、教員間の連携体制を整備する。
- ⑥体験的教育の充実を図るため、実験や演習を補佐する教職員等を各学科に配置する。

有・

2. 実施計画

(1) 必須型

実施計画(タイトル)	1-(1)-① 「Kwansei コンピテンシー」の策定と運用				帳票の有無	不要
内容	本大学は、大学として「学部の区別なく学生が共通に身に付けるべき知識・能力・資質」(「Kwansei コンピテンシー」)を時代に即して新たに定め、各学部はそれを土台に「各分野における学位授与に必要な知識・技能」であるDP(ディプロマポリシー)を再策定する。 また、策定された「Kwansei コンピテンシー」を基に大学として「学部の区別なく学生が共通に身に付けるべき知識・能力・資質」の到達状況を測定、評価する取組を推進する。					
学部独自の取り組み内容						
<指標 1>						
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度		
目標						
実績						
年度毎の目標	※学部における毎年度の本帳票の作成および学内各種会議体での点検・評価、改善活動などにより、内部質保証システムの PDCA サイクルを確立する。					
目標						
実績						
<指標 2>						
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度		
目標						
実績						
年度毎の目標	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度		
目標						
実績						
【2022 年度の進捗状況・今後の取り組み】						

実施計画(タイトル)	1-(1)-② 三つのポリシーに基づく教学マネジメントの推進(3ポリシーの見直し・検証、カリキュラム見直し・拡充、カリキュラムマップの整備)			帳票の有無	不要
内容	<p>本学は、大学として「学部の区別なく学生が共通に身に付けるべき知識・能力・資質」(「Kwansei コンピテンシー」)を時代に即して新たに定め、各学部・研究科はそれを土台に「各分野における学位授与に必要な知識・技能」であるDP(ディプロマポリシー)を策定する。このDPは、すべての学生が卒業/修了必要単位数を取得した段階で修得しているべき学修成果を表したものである。この基本原理を守るべく、学部・研究科は(a)DPの再確認(b)DPとCP(カリキュラムポリシー)の整合(c)シラバスの実質化(d)シラバスに沿った成績評価(e)DPとAP(アドミッションポリシー)の連動、を厳格に運用する。</p> <p>本学はこうした学部/研究科による三つのポリシーに基づく教学マネジメントを統括し、大学全体の内部質保証を推進することで、卒業する全ての学生の質を保証する。</p>				
学部独自の取り組み内容	3ポリシーについて、年度ごとに教授会において内容の検証を行う。 理学部の3ポリシーを策定し、学生履修心得、学生募集要項、ホームページにおいて公開する。				
<指標1>	3つのポリシーの定期的な確認・検証の実施				
年度毎の目標	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	
目標	教授会において内容確認・検証 3学部設置準備委員会に置いて策定	3学部の教授会において内容確認・検証	3学部の教授会において内容確認・検証	3学部の教授会において内容確認・検証	
実績	2021年度以降の理・工・生命環境学部 合同設置準備委員会において 3ポリシーを策定	3ポリシーを確認する 学生履修心得、ホームページで公開	3ポリシーを確認する 学生履修心得、学生募集要項、ホーム ページで公開		
年度毎の目標	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度	
目標	3学部の教授会において内容確認・検証	3学部の教授会において内容確認・検証	3学部の教授会において内容確認・検証	3学部の教授会において内容確認・検証	
実績					
<指標2>					
年度毎の目標	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	
目標					
実績					
年度毎の目標	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度	
目標					
実績					
<p>【2022年度の進捗状況・今後の取り組み】</p> <p>理学部の3ポリシーを策定し、学生履修心得、学生募集要項、ホームページにて公開のうえ、2022年5月の教授会において確認した。</p>					

実施計画(タイトル)	1-(9)-① 入試制度改革への対応				帳票の有無	不要
内容	<p>グローバル化や情報化の進展、少子高齢社会の到来など社会の在り方が急速に変わり、予測が難しい状況の中で、自ら問題を発見し、他者と協力して解決していくための力が必要とされており、2015年1月に文部科学省より「高大接続改革実行プラン」が発表され、高大接続改革は、「高校教育」「大学教育」そしてそれをつなぐ「大学入学者選抜」の一体的な改革で、それぞれについて様々な施策が進んでいる。「大学入学者選抜改革」においては、これまで以上に多面的・総合的に人物を評価する入試への転換を掲げ、大学入試センター試験を廃止し、思考力・判断力・表現力を一層重視した「大学入学共通テスト」を2020年度(2021年1月実施)より導入。大学入学共通テストでは、国語と数学に記述式問題を導入すること、英語については4技能を適切に評価するため民間の資格・検定試験を活用することが決まっている。また、各大学の個別選抜では、アドミッション・ポリシーの明確化とともに、より多面的な選抜方法にすることが求められている。一方、AO入試や推薦入試では、一部で「学力不問になっている」といった批判があることから、小論文やプレゼンテーション、大学入学共通テストなどを通じて、学力を問う試験を必須化する方針も示されている。</p> <p>このような状況において、本学においては学長が入試委員長として全学部長が入試委員となる入試委員会が中心となり、以下のような入試制度改革を進めていく。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 高大接続改革で求められる入試制度改革への対応 上記の改革を進めるため、本学ではすべての入試において「学力3要素」を評価する入試へと変えていく。また、SGUでもある本学においてはすべての入試において英語の4技能を評価する入試へと変えていく。合わせて、各種入試においても、現行やや一芸入試的な色合いの濃いAO入試においては高等学校での活動をしっかりと評価する入試への変更を、そして、現行SGH・SSH指定校に限定している公募推薦入試も課題研究を実践しているすべての高等学校に拡大し、高等学校での探究活動を評価する入試へと変更させていく。 2. 現行入試制度・募集人員の再検討 上記のような国の高大接続改革が進むと、例えば、国公立大学ではAO入試の割合が増加する。また、18歳人口の減少という人口構造の変化(少子化)により、より一層前倒し(各種入試への定員のシフト)によって学生を確保する必要がある。今後、各種入試と一般入試の定員比率の再検討とともに、各種入試の定員の見直しを進める必要がある。 3. 主体性等を評価するための入試体制強化やアドミッションオフィサー配置 上記のとおり、今後の大学入試においては、学力3要素を評価するため、小論文やプレゼンテーション、課題研究論文、面接や調査書など高等学校への学びをひとりひとり丁寧に評価する入試が拡大してくる。それに伴って当然、これまで入試選抜を担ってこられた教員だけでは対応することが困難となる。そのため、職員からも提出書類の評価を行うアドミッションオフィサーを配置することが求められる。今後、アドミッションオフィサーへの入試評価業務の委嘱を進めていく。 					
学部独自の取り組み内容	各種入試の整理、一般入試制度を再構築し、各種入試において安定した入学者の確保と一般入試の偏差値を上げ、レベルの維持と入学定員の確保を目指す。					
<指標1>	偏差値					
年度毎の目標	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度		
目標	前年比上昇	前年比上昇	前年比上昇	前年比上昇		
実績	非公開	非公開	非公開	非公開		
年度毎の目標	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度		
目標	前年比上昇	前年比維持	前年比維持	前年比維持		
実績	非公開	非公開	非公開	非公開		
<指標2>	入学者(定員確保を前提とした)における一般入試比率					
年度毎の目標	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度		
目標	非公開	非公開	非公開	非公開		
実績	非公開	非公開	非公開	非公開		
年度毎の目標	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度		
目標	非公開	非公開	非公開	非公開		
実績	非公開	非公開	非公開	非公開		
<p>【2022年度の進捗状況・今後の取り組み】 2021年度入試では、指定校推薦入試制度の見直し、一般入試制度改革、および新設に伴う広報活動により、180名の定員に対して184名の入学者を得ることができた。(再編初年度) 2022年度入試では入学定員1.06倍という結果であった。</p> <p>一般入試受験者数の獲得と安定した合格者卒の確保が求められており、そのためには推薦入学での安定した入学者の確保が課題であることから、引き続き、①指定校推薦入学依頼校の見直し、②院内・継続・提携校との高大連携活動の取り組み検討の開始、③系属校との高大連携活動の開始、を行った。</p> <p>2025年度入試の目標である一般入試入学者比率を安定的に実現するために継続して各種入試の統廃合、アドミッション・ポリシーに照らした入学者の獲得、一般入試制度改革に取り組む。</p> <p>また、2023年度入試以降は系属校である賢明学院高等学校からの入学者も想定されるため、引き続きの各種入試での調整が必要である。</p> <p>学部再編の目的のひとつが「偏差値上昇」である。入学後の授業実施および大学院進学率の向上のためにもより高いレベルの入学者確保が課題である。また、学生の能力を客観的・総合的に評価するためにもIRデータ等を活用した調査・検証が必要である。</p>						

実施計画(タイトル)	1-(12)-⑧ シラバスの実質化			帳票の有無	不要
内容	組織的な教育力を向上するため、三つのポリシーに基づく教学マネジメントを推進することが中心的な課題であり、そのための重点戦略としてシラバスの精緻化から取り組む。特に「授業目的」と「到達目標」を明確にすることで、カリキュラム全体の中での科目の位置づけや他の科目との比較が可能になり、科目間の相互関係を整理する契機となる。それによって CP や DP の適切性・妥当性といった上流に遡ることが可能となる。また、シラバスの精緻化は、授業外学修時間の増加につながる。				
学部独自の取り組み内容	理学部では全科目について各学科のカリキュラム担当教員がシラバスを一斉にチェックしている。				
<指標 1>	「学修行動と授業に関する調査」における、「あなたは、シラバスに示された授業の目的や、到達目標を達成できると思いますか。」についての学部平均得点。				
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度	
目標	4.0	4.0	4.0	4.0	
実績	3.89	3.79			
年度毎の目標	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度	
目標	4.0	4.0	4.0	4.0	
実績					
<指標 2>					
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度	
目標					
実績					
年度毎の目標	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度	
目標					
実績					
<p>【2022 年度の進捗状況・今後の取り組み】</p> <p>全科目について、各学科のカリキュラム担当教員がシラバスを一斉にチェックしている。 2023 年度シラバスについても、各学科カリキュラム担当委員が、授業計画、授業目的、到達目標を重点チェック項目として一斉チェックを実施予定である。 指標1「学修行動と授業に関する調査」における「あなたは、シラバスに示された授業の目的や、到達目標を達成できると思いますか。」についての学部平均得点は、工学部、生命環境学部学部に比して低い数値が出ており、引き続き 2022 年度調査でも確認する必要がある。(ちなみに 2022 春は 3.38)</p>					

実施計画(タイトル)	1-(13)-② 教職協働によるアカデミックアドバイスの仕組み確立			帳票の有無	不要
内容	<p>教職協働によるアカデミックアドバイスの仕組みを確立し、学生の学びをサポートし、残留生、退学者をださないキャンパスを目指す。アカデミックアドバイス制度は実施から4年がたち、現在行われている対象学生の見直しなどの検討も必要となっている。</p> <p>— 以下、SGU時の文章 —</p> <p>本学では、従来から成績不振者へのサポートを目的とした様々な指導を学部ごとに実施してきたが、GPAのさらなる活用と学生に対してより適切かつ高度な学修支援を行うという観点から、2015年度より「アカデミックアドバイザー制度」を全学的な仕組みとして導入する。</p> <p>アカデミックアドバイザーは、学部ごとに人数を定め、学部所属の専任教員から選出するものとする。各学部は修得単位数、GPA、出席状況のいずれか、もしくは複数を用いて指導対象となる学生の基準を定める。指導対象学生に対しては、アカデミックアドバイザーが個別面談および学修指導等の修学上の支援を行う。</p> <p>制度導入後は、教育力向上(ファカルティ・ディベロップメント)部会において本制度の運用状況に関する情報共有を行い、より一層の改善等に取り組む予定である。</p>				
学部独自の取り組み内容	理学部では全学生を対象に入学時から卒業研究配属までの間に担任制度を実施しており、各学期開始前には成績を参照しながら履修指導を行っている。これにより成績などの表面的な問題はもちろん、修学上の問題やその背景にある諸問題に密接に対応することができる。				
<指標 1>	アカデミックアドバイザーによる面談対象学生のうち、面談を実施した学生の割合(面談実施率)				
年度毎の目標	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	
目標	56%	58%	60%	62%	
実績	2020春:66% <2019春:55%> <2018春:73%>	2021春:85%(1年)	2022春:77.4%(1,2年)		
年度毎の目標	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度	
目標	64%	66%	68%	70%	
実績					
<指標 2>					
年度毎の目標	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	
目標					
実績					
年度毎の目標	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度	
目標					
実績					
<p>【2022年度の進捗状況・今後の取り組み】</p> <p>2022年度春学期終了後の面談は、リモートによるものを利用しながら実施し、学生のケアのための担任教員による支援を行った。また2023年度へ向けてはAA面談、担任による履修指導について、履修指導ミスをなくすためのマニュアル作りを検討している。</p>					

実施計画(タイトル)	1-(13)-③ TA・LA・SAの活用推進			帳票の有無	要
内容	<p>LAの配置により、授業での教育支援(教員への支援を含む)、授業外での学修支援を強化する。初年次教育である導入科目等を対象としたLAについては制度開始から7年がたち、今後の在り方は新たなライティングサポート制度と合わせて考えていく。</p> <p>SAについては、特に全学科目情報科学科目の現状の課題を抽出し、現状のままか、外部委託するかを検討する。</p> <p>TAについては各学部では、①大学院生の減少で確保が難しい、②大学院生全員にあたらぬ、③月額報酬の場合、報酬に対して実働が少ない、人によって実働に差が生じる、④確保したいが他研究科生を重複採用できない、などの課題があり、①業務実働に合わせた報酬制度、②他研究科生の重複採用、③外部委託、などを検討することが考えられる。</p>				
学部独自の取り組み内容	理学部ではカリキュラムWGを通じLAの配置要望を聴取し、配置科目や人数を検討・調整している。これにより授業担当者からどのような業務を指示できるのかと行った相談や問合せにも統一した対応ができています。				
<指標1>	TA、LA活用の効果検証の実施				
年度毎の目標	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	
目標	カリキュラムWGにおいてTA、LA活用の効果検証を行う	理・工・生命環境学部3学部合同のカリキュラムWG(予定)においてTA、LA活用の効果検証を行う	理・工・生命環境学部3学部合同のカリキュラムWG(予定)においてTA、LA活用の効果検証を行う	理・工・生命環境学部3学部合同のカリキュラムWG(予定)においてTA、LA活用の効果検証を行う	
実績	LA:カリキュラムWGにて実績報告に基づき意見交換 TA:実施できていない	LA:カリキュラムWGにて実績報告に基づき意見交換 TA:実施できていない	LA:カリキュラムWGにて実績報告に基づき意見交換 TA:実施できていない		
年度毎の目標	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度	
目標	理・工・生命環境学部3学部合同のカリキュラムWG(予定)においてTA、LA活用の効果検証を行う	理・工・生命環境学部3学部合同のカリキュラムWG(予定)においてTA、LA活用の効果検証を行う	理・工・生命環境学部3学部合同のカリキュラムWG(予定)においてTA、LA活用の効果検証を行う	理・工・生命環境学部3学部合同のカリキュラムWG(予定)においてTA、LA活用の効果検証を行う	
実績					
<指標2>					
年度毎の目標	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	
目標					
実績					
年度毎の目標	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度	
目標					
実績					
<p>【2022年度の進捗状況・今後の取り組み】</p> <p>LAについては授業担当者からの実績報告および教務機構実施のLAに対するアンケート結果に基づきカリキュラムWGにおいて意見交換を行った。TAについては効果検証の方法の検討等を行っていない。効果検証の方法について検討する予定であるが、現時点ではできていない。</p>					

実施計画(タイトル)	8-(2)-① KGI・KPIの設定・活用			帳票の有無	不要
内容	<p>非営利組織である学校のマネジメントにおける最大の課題の一つは、最上位のアウトカム(成果)を定め、その達成度を測るKGIやKPIを設定することにある。学院ではKPIダッシュボード等のツールを活用して「Kwansei Grand Challenge 2039」(超長期ビジョン・長期戦略)および中期総合経営計画(実施計画・基盤計画)の進捗や達成度を含めた成果を検証する仕組みを構築する。そのために、教学・経営両面のデータ活用を司るのに最適な組織体制を確立する。また、各学校および大学の各学部も、全学のKPIと連動しながら個別の状況に合わせて独自にKPIを設定し、毎年その数値や取組状況を評価し、改善・促進の取り組みに活用する。</p>				
学部独自の取り組み内容					
<指標 1>					
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度	
目標					
実績					
年度毎の目標	※本帳票の末尾において、学修成果を測定する学部独自のKGI・KPIを策定しており、これらの指標を用いて毎年度学部における実施計画・全体の取組みの評価を行っている。				
目標					
実績					
<指標 2>					
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度	
目標					
実績					
年度毎の目標	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度	
目標					
実績					
【2022 年度の進捗状況・今後の取り組み】					

実施計画(タイトル)	8-(10)-① 内部質保証体制の確立と運用			帳票の有無	要
内容	<p>本学には、従来から二つの大きなPDCAサイクルが存在していた。一つは中期計画(含む)であり、もう一つは大学の自己点検・評価および各学校の学校評価である。両者はそれぞれの目的体系を持ちながら重複する部分が多く、業務負担の軽減の観点からも、共通の目的・目標の下で学院・大学全体を見渡した統合的なPDCAサイクルの確立が必須となっている。</p> <p>このため、本学では、2019年度から各学部／研究科、短期大学・各学校が本格的に取組を開始する「中期総合経営計画」において、その取組の成果を定期的に測定、評価、改善することを通じて、効率的・効果的なマネジメントの実現を図る。</p>				
学部独自の取り組み内容					
<指標 1>					
年度毎の目標	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	
目標					
実績					
年度毎の目標	※2020年度入学生より、「Kwansei コンピテンシー」を獲得することを念頭に置く旨を、各学部のディプロマ・ポリシー(DP)に追記済。				
目標					
実績					
<指標 2>					
年度毎の目標	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	
目標					
実績					
年度毎の目標	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度	
目標					
実績					
【2022年度の進捗状況・今後の取り組み】					

(2) 選択型

実施計画(タイトル)	1-(2)-② 各学部の独自指標の設定			帳票の有無	不要
内容	<p>■本長期戦略では、『質の高い就労』の実現をテーマに、「就職率」「内定先の満足度」「各学部設定の独自指標」「有名400社への実就職率」「IPOの人数」「グローバル企業就職者比率」「一部上場企業社長の輩出人数」を指標とし、各フェーズ・年度における目標値を定めた。これを達成するための実施施策は、「高い『就職率』維持のための各種施策の実施」「高い『内定先の満足度』維持のための各種施策の実施」「『有名400社への実就職率』向上のための各種施策の実施」「『グローバル企業への就職者比率』向上のための各種施策の実施」そして『各学部の独自指標』の設定」「アントレプレナー養成のための各種施策の実施」「AIを活用したキャリア支援」をあげている。</p> <p>■本帳票は、これらの内、『各学部の独自指標』の設定について記載する。</p> <p>■各学部はそれぞれ特色があり、人材養成像も各学部で異なる。従って、「質の高い就労」を実現するための大学全体の実施計画(指標)とは別に、独自の指標を持つ必要のある学部がある。その際に独自指標を設定する。</p> <p>■2021年度以降はキャリアセンター算出指標を使用する。</p>				
学部独自の取り組み内容	理学部では長期戦略の1つとして「理系研究室の充実」を継続して掲げ、その指標として「理学部から理工学研究科博士課程前期課程への進学率」と「前期課程修了者の研究開発職への就職率」を設定し、これらの向上を目指して取り組む。				
<指標1>	理学部から理工学研究科博士課程前期課程への進学率(内部進学者÷卒業生)				
年度毎の目標	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	
目標	45%以上	50%以上	52%以上	54%以上	
実績	36.9%(理工学部) 2019年度卒業生	38.1%(理工学部) 2020年度卒業生	39.5%(理工学部) 2021年度卒業生	% (理工学部)	
年度毎の目標	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度	
目標	55%以上	55%以上	57%以上	60%以上	
実績	% (理工学部)	% (理学部)	% (理学部)	% (理学部)	
<指標2>	前期課程修了者の研究開発職への就職率(キャリアセンター算出値)				
年度毎の目標	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	
目標	指標を確立する	30%以上	50%以上	50%以上	
実績	理工独自調査結果とキャリアセンター 把握実績との比較実施	55.4% 2020年度修了者	46.3% 2021年度卒業生	% (理学部)	
年度毎の目標	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度	
目標	55%以上	55%以上	55%以上	55%以上	
実績	% (理学部)	% (理学部)	% (理学部)	% (理学部)	
【2022年度の進捗状況・今後の取り組み】					
<ul style="list-style-type: none"> ・「理工学部から理工学研究科博士課程前期課程への進学率」の向上に向けて、2020年度から学部生の早期履修制度の運用を継続している。 ・2021年度は、夏の教育懇談会が中止となり、保証人対象に大学院入学のメッセージが発信できなかったため、オンライン開催の保証人向け教育懇談会(2021年11月27日実施)において「理系学生のキャリアについて」の中で、「大学院進学の魅力とメリット」として、研究科副委員長による講話および大学院生を含めたパネルディスカッションを実施した。 ・「大学院進学の魅力とメリット」アーカイブは2022年度も保証人向けに公開した。 ・「前期課程修了者の研究開発職への就職率」の向上に向けては、理工学部独自調査結果とキャリアセンター把握実績の比較・検証を行った。ただし前者の回収率は60%強にとどまった。2021年度においては、分類区分の見直しについて、キャリアセンターと情報交換を実施し、キャリアセンターのアンケートにおいても、研究開発的SEを含めた整理が可能であることを確認した。並行して就職委員による企業訪問の実施を進めている。 ・研究開発職への就職率が2021年度に比して低下していることについて、明確な要因が判明していないが、年度毎卒業生による誤差の範囲内であると推測される(キャリアセンター) ・2021年度よりKSC学部再編の教育・研究の4つの特徴のひとつである学問分野の境界を越えた学びとして「KSC分野横断型教育プログラム」を展開することで高い専門性を持ちつつも学問分野を越えて複眼的な視野や思考を持った人材の育成を図っているが、これを大学院進学率の向上に結び付けていく指導および教育が必要である。 ・2022年度も「KSC分野横断型教育プログラム」は開講しており、継続した取り組みを行っている。 					

3. 理学部のKPI

(1) 学修成果に関するKPI

KPI	定義	基準	現在値 (2018年度)	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
DPIに定める資質・能力の獲得状況	あなたはこの授業を通して卒業までに求められる資質・能力を向上できたと思いますか。(「そう思う」～「そう思わない」の5段階評価) 「学修行動と授業に関する調査」	5段階評価のうち、上位2つ (A「そう思う」、B「どちらかといえばそう思う」)の回答割合(%)	現在値 (2018年度)				非公開
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
Kwansei コンピテンシー獲得状況	知識・能力・資質の程度 全項目 (「大変身についた」～「全く身につけていない」の5段階評価) (2018～2022年度) 当該年度卒業生と次年度1年生との調査による伸び (2023～2027年度) 当該年度卒業生とその1年生時との調査による伸び 「IR 新入生調査」「IR 卒業生調査」 なお、()は参考値	5段階評価のうち、上位2つ (「大変身についた」「やや身についた」)の回答割合(%)の平均の差	現在値 (2018年度)				非公開
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
汎用的能力の獲得状況	入学後の能力変化(表外※参照) (「大きく増えた」～「大きく減った」の5段階評価) 「IR 上級生調査」	5段階評価のうち、上位2つ (A「大きく増えた」、B「増えた」)の回答割合(%)	現在値 (2018年度)				非公開
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
授業外学修時間	授業外時間に、授業課題や準備時間、復習をする時間(一週当たりの平均) 「IR1年生調査、IR 上級生調査」	一週あたり6時間以上の割合	現在値 (2018年度)				非公開
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
授業目的・到達目標の達成度	あなたは、シラバスに示された授業の目的や、到達目標を達成できると思いますか。(「そう思う」～「そう思わない」の5段階評価) 「学修行動と授業に関する調査」	5段階評価のうち、A「そう思う」、B「どちらかというそう思う」の回答割合(%)	現在値 (2018年度)				非公開
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
授業満足度	あなたは、全体としてこの授業に満足していますか。(「そう思う」～「そう思わない」の5段階評価) 「学修行動と授業に関する調査」	5段階評価のうち、A「そう思う」、B「どちらかというそう思う」の回答割合(%)	現在値 (2018年度)				非公開
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
留学等派遣数	協定校への派遣学生数 「国際連携機構資料」	大学間協定に基づく派遣日本人学生数	現在値 (2018年度)				非公開
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
TOEIC/TOEFL等の英語運用能力	SGUの取組みで確認している TOEFL 換算得点目標の達成人数 <参考(学部別目標値)> ■国際: TOEFL 換算 550点 ■文・総政: TOEFL 換算 540点 ■その他: TOEFL 換算 520点 「SGUに関する調査」	左記「TOEFL 換算得点」目標の達成人数(人)	現在値 (2018年度)				非公開
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
学生生活満足度	大学生生活を振り返って、学生生活は満足したものでしたか。(「満足」～「不満」の5段階評価) 「IR 卒業1年目調査」	5段階評価のうち、上位2つ (A「満足」、B「そこそこ満足」)の回答割合(%) *2018年度調査までは、A「とても満足」、B「満足」と回答した比率	現在値 (2018年度)				非公開
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
就職率	就職率 「キャリアセンター統計資料」	就職者数(自営含まず)/就職希望者数	現在値 (2018年度)				非公開
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
大学院進学率	大学院進学率 「キャリアセンター統計資料」	大学院進学者数/学部卒業生数	現在値 (2018年度)				非公開
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開

(※)「知識・技能・能力の獲得状況」の「知識・技能・能力」とは、一般的な教養、論理的思考力、専門分野や学科の知識、グローバルな問題の理解、多様性を尊重する力、主体的に行動する力、リーダーシップ力、人間関係を構築する力、対立する価値を調整する力、地域社会が直面する問題を理解する能力、国民が直面する問題を理解する能力、困難を乗り越える粘り強さ、文章表現の能力、外国語の運用能力、生涯にわたって学び続ける能力、コミュニケーション能力、プレゼンテーション能力、数理的な能力、コンピュータの操作能力、誠実さと品位、時間を効果的に利用する能力、卒業後に就職するための準備の程度、を指す。

(2) 学部独自KPI

KPI	定義	基準	現在値(2018年度)	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	
本学理工学研究科への進学率	理学部から本学大学院理工学研究科博士前期課程への進学率	2025年3月理工学部生の進学率	現在値(2018年度)				非公開	非公開
			2023年度				2026年度	2027年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開	
			現在値(2018年度)				非公開	非公開
			2023年度				2026年度	2027年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開	

(3) 学院全体のKPIに関する指標

KPI	定義	基準	現在値(2018年度)	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	
入試難易度(偏差値)	ベネッセの進研模試のデータにおける合格可能性60%以上となる偏差値(次年度偏差値予想を記載) 高大接続センター		現在値(2018年度)			非公開	非公開	非公開
			2023年度				2026年度	2027年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開	
同系列学部勝敗	ベネッセの進研模試のデータにおける同系列学部合格者の競合大学(同志社、立命館、関西)との入学比率(当該年度結果を記載) 総合企画部	本学と相手校の両方に合格していずれかに入学した受験生のうち、本学に入学した者の比率 本学入学数/(本学入学数+併願校入学数)(%)	現在値(2018年度)				非公開	非公開
			2023年度				2026年度	2027年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開	
外国人留学者数	外国人留学生 CIEC 年次報告書	詳細は SGU の定義に準拠	現在値(2018年度)				非公開	非公開
			2023年度				2026年度	2027年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開	
ダブルチャレンジ派遣者数	当該年度の卒業生のうち、ダブルチャレンジ制度のアウェイチャレンジの単位を取得して卒業した学生数 グローバル推進本部	①インターナショナルプログラム②ハンズオン・ラーニング・プログラム③副専攻プログラムのいずれかで単位取得し卒業した学生数 ※学部毎は延べ人数	現在値(2018年度)					
			2023年度				2026年度	2027年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開	
卒業後の進路の満足度	卒業後の進路の満足度(「満足」～「不満」の5段階評価) 卒業時調査	5段階評価のうち「満足」と回答した比率(%)	現在値(2018年度)					
			2023年度				2026年度	2027年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開	
スクールモットーの浸透度	スクールモットー“Mastery for Service”を普段意識する程度は(「常に行動の規範としている」～「全く意識しない」の5段階評価) IR 卒業生調査	5段階評価のうち、A「常に行動の規範としている」または B「ときどき意識している」と回答した割合(%) *2018年度調査までは A「常に行動の規範としている」または B「頻繁に意識している」と回答した比率	現在値(2018年度)					
			2023年度				2026年度	2027年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開	
Well-being 度	現在の自分を取り巻く環境(特定7項目)に対して、あなたはどのように思いますか。(「そう思う」～「そう思わない」の4段階評価) IR 卒業生調査	「E 時折、収入面が不安になることがある」を除く7項目に対して A「そう思う」、B「どちらかといえばそう思う」と回答した割合の平均値	現在値(2018年度)					
			2023年度				2026年度	2027年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開	

理学部実施計画・全体評価
<p>「学修行動と授業に関する調査」では、生命環境学部、工学部に比べて「この授業を通して卒業までに求められる資質・能力を向上できたと思いますか」の項目が低く出ている。また、「シラバスに示された授業の目的や、到達目標を達成できると思いますか」の項目も同様である。</p> <p>在学生調査(1年)でもスクールモットーの理解度がやや低い傾向が出ており、初年次の授業において、充実感、達成感が生じにくいことも考えられる。理学部では、基礎を重視したカリキュラム構成となっているためであることも一因ではあるが、多様さが増している理学部生学修意欲や研究意欲を向上させることが必要である。基礎重視の理学部における教育・研究プログラムへの関心度を高めるためにも学部ぐるみで学部初年次のオリエンテーションや履修指導、授業の中で基礎科学と応用との深い関連について説いていく必要がある。</p> <p>基礎科学がいかに人類に貢献してきたかを認識していく過程で、学部理念、大学理念の理解度も向上していくものだと考えられる。</p> <p>上記のことは入学者募集にも深くかわかり、一般入試では国公立大学との併願者は多いが、指定校推薦の出願率、院内、継続、系属、提携各校からの出願者を増やすことが重要である。引き続き、高大連携委員会において、院内各校との連携、模擬授業講師派遣にも積極的に関与していく必要がある。</p> <p>学部独自 KPI については、理工学部からの継続で、「本学理工学研究科への進学率」とした。数値を出すためには、初年次からの働きかけが大切であり、2023年度には、これまでコロナ禍で中止とした「保証人向け入学説明会」を開催し「大学院進学のおすすめ」を予定している。そしてこれに続き、入学生自身が大学院進学を考える場づくりを用意することが大切である。</p>